右記者畧舉本縁起之要領耳
尚存増補追刻之志云尓

五臺山清涼寺

栴檀の尊容を拝見しまつる上ハ無始の罪障忽て消滅せられん
と随喜乃涙千万行なりきさ夫より以後ハいよ／＼信心堅
固にして念仏を修す終に八十二歳にして往生の素懐を
遂にけり往生の刹ハ紫雲靈香にたなびきて目出度瑞相
を顕となり彼尼公遺言に曰此仏舎利ハ如来より賜りれど
只本寺乃御厨子へ返し入まつるべしと申置間其義をなさんど
りいれまつるそのうち夢想の告ありて深巖の奥藏泉庵乃師
阿弥陀仏よ傳へまつることのなり彼人も當寺に於て其功あさ
多かりき其ハ勞不空也しによりて如斯其告あるか馮しき哉

釋迦如來栴檀瑞像記終

是の御詣（まうで）をも感應（かんおう）せしかバ彼妙心（めうしん）恩愛を蒙（かうむ）る如来告（つげ）て
のたまハく汝過去（くわこ）の悪因（あくいん）ありしによりて如来の拝見（はいけん）をうくることあたハざ
いへども志あつきまし又ども多年步を運（はこ）び罪障懺悔（ざいしやうさんげ）の心ざし
真実（しんじつ）なるによりて今よりの後ハ真容（しんよう）を拝（はい）させんとその[illegible]
[illegible]ハ明日午（ひる）の刻（こく）に東山法性寺より一人の僧来りて汝に舎利
をあたふべし感得（かんとく）をせしとなり其告むかしう待て翌日（つぎのひ）一
人の僧来りていハく汝に御舎利を授与（じゆよ）すべきよし夢想（むさう）の
告（つげ）今ハなり愚僧（ぐそう）久しく所持（しよぢ）の舎利ハ甚惜（はなはだをし）く存じども如来
の御告堅固（けんご）なる間子細（しさい）あるべからず今与（あた）ふる所なりとて
御舎利の大さ小豆（あづき）粒（つぶ）ほどにて鈍色（にぶいろ）なりけるをなく〳〵授（さづけ）ぬ
帰りてぞ彼尼公真骨（しんこつ）を得（う）る所をよろこびのあまり嬉く

丁酉冬十二月天下静謐して此尊像も又舊寺にうつし奉る
ことのなり本尊の御光破損の剥を浄教寺の長老立誉上人は
夢想の告ありて其比鳥山乃なにがしとぞすぐれたる細工の仁有
けるに申付られ修造し奉る鳥山此結縁せられしかば夢想乃告
ありて大往生殊遂にけり
○此瑞像を拝せざりし仁は拝着より今に至りて都鄙の是
多し名字殊書きに及ばずといへども往来の中にも常に志ある尚
内にも北野に一人の沙弥ありて拝みをすることなく間及びけるに
○同所宮前ある所の門前に一人の尼公あり諸人異名して山の神
とも名付又は蛇尼ともいへり本尊殊拝を申比事あさいさぎよく
て歳二十の時より浅からず思ひいれて七十有余に至るまで毎夜怖をそ

和泉の堺り若狭の小濱の小安置せば定て信人参詣して群
集をなしなば佛おれ散銭莫太の正得あらんと争ひよ浄論
して終かまゝ二人足恆の長たる者剃ちゝてるにある志羅小廣見へい
きの是れ告知らせさる人を向悦謝の礼をはくさんとて尋けるにつゐ
そし其人曰く金日これ忍靈廟乃御告なりしとて感涙をぞながし
ける剃彼徒なる人其まゝ命を亡しけるは希奇の事なりけるずや
○文明二年庚寅の春浄教寺の長老夏つんくる廣見走来りて
尸ノ且當寺れ本堂に瑞像を遷しなんと欲を御沙汰中如何と問
長老不可及異儀二不可奉遷と云ふと云へは拂て門を杦く反変
ハさあは一条敷より使者來って彼異僧と佛殿よ安置せまむしと
なりし後の間浄教寺に遷しまて八年の間此りましかり文明九年

徒る間釈尊の説法なとけなりと法人云ひあつりそのうち衆生し高
又釈尊に結縁ある此人地して當時の法堂の上葺をも修興し降よ
年久しく功を積し人なりきされば如くれ非業の死を除こ
とる由へ示さるのなり
○延仁二年戊子九月廿日に瑞像を先北野の神祠の側より
安置しける或夕浄衣被たる老人廣見が戸を扣きて告て曰
今夜賊徒瑞像を偷んとする衆会ぬいて色閉ておかで云
捨て去ぬ廣見大に驚て将軍家の御一族一色殿乃士卒を雇
て守護しける其翌日徒人風聞志けるハ昨夜賊徒等高橋
神明の林乃間に集会して内談しけるハ此仏ハ栴檀なり是を
破りて売んに其價量なる見じとて又一人がいはく但此仏をば

所列末来より順次の所作をこそ続べかれそいふべく念佛せざらば
まれなる去間所列ふ来して文明年中に往生を遂られたる老二言
に曰我往生の後七ヶ日の間往生院の三昧の私本の中に居ざし
ゆく下置れなる間供具飯をば調へて七ヶ日彼本の中に置きつへをと
鳥獣もあらざれ不思儀なりし事どもなり
○秋元のほり意あれて不断は華厳讃誦の雲廣見巳下にて一万八千
経部讃読経の功終りぬ然るに意之乃乱に秋元は京都へ遷し
奉りけれども其甲冑とて大井川へ入水しけるとぞも桂川までおよぶ
煩なくなられゆく所の腕和を寄て夜ごとに人々いふごとく問ふより
廣見答て曰およそなさけなくとその故に香の衣を被給ふる事侍
氷の上ありとみ絶く損さ海しまれど共これまで流来るなりと

除寺ハ無桐遠今ニ存在する大火所焼時我此土安穏乃金言
ぞいひ合されてありがたくぞ侍りける彼寺ハ多年御本尊信
仰の者なりける此僧ハ六十八歳ニして大往生をとげたりき
◯一百三代後花園院の御宇ニ惟子讃阿とて発心者ありて十九
歳より九十歳まで月参し一期の間惟子一つをきて夏冬に衣
別なし一生持斎の聖なり歩行速綿とよばれしハ今此姿婆
乃苦界ニ久しく長せて更ニ無益早く極楽往生の素懐をと
げて不退の快楽ニ預らんとて二尊院の西ノ端されたる
櫻の枝ニ縄を付て頸を縊てまかれバ木の枝さけて息をとげず
甲斐なくしてまた大堰川の千鳥が淵にて入水せられたれ共水に
溺るゝ折から推参せし者ありけるが見付て執筆されけり扨ハ往生の

六十餘所地下の在家三千餘宇類火の及ぶ所なり南ハ二王門鐘楼往多宝塔五大堂皆灰燼と煙り中にも格く良賢法印といへる僧と不断読経の聖広見禅師といふ人瑞像を守て中院の光基寺竹恵の中に遷し置るが其の損ふ事一毛のごとし此日晩方に大雨車軸のごとく降て余炎早く滅尽し清涼栖霞乃両寺ばかり僅に残りし故又霊像を舁て旧寺に帰し奉らんとするに其の重き事千鈞のごとし廿人餘りに及て舁挙て安置せしといへり

○寛仁二年九月七日の炎上ハ丹波勢強盛中に乱入乃附火なり堂舎仏閣并在家共に炎上劫火のごとし二王鐘楼五大堂も焚たる上ハ清涼寺までも類火かゝりて既に危くみえけるが所り

遇けるが彼吊にけり餓鬼道を出離せる事を得らんとて笑給合
喜へる気色あらくて打失ぬ人々ふ至りて十月ま白ござる彼吊乃
儀式而終となん
○同頃よりに當寺因斎の人々事多き中に往生院よ念佛上
人といひし聖ありき者ぞ存ありけり日斎して平天往生極楽乃
祈誓ありけるは他事更になかりし或時は落し下向の後ひ西の門
ありて立ながら往生の素懐をとげて後人の出せし罪ある尊音
楽虚空に聞へて同出家奇瑞を現はせり
○福、應仁元年丁亥五月廿六日洛中東西二つに分れて天下動
乱大に起る同二年戊子九月七日ふ焼亡洛中多くの名刹とも天
龍寺臨川寺寶幢寺景徳寺西禅寺其の法刹法塔皆大ふ

此僧を頼みし浄蔵の釈迦堂へまゐり給ひ此慈悲憐愍に
て彼堂より三四町辰巳の方に行て小渕の道者が家にて此
尋ありて妻子に告給ひつる七某が持分十四名あり一名
より上米一石宛釈迦堂へまゐらせて大仏供を備へ百味乃
飲食を調へは華八種を執行ひて飢渇の苦患を除く
べし約束ましく是が証に奉るとて着たる帷子の袖を解て彼僧
にあたへてかきけすやうに失ぬるは此僧奇特の思ひをなし
天性慈悲の僧にて立よりて直に高渕にいたり彼家を尋
行て委細を語り残る妻子ども件の帷子の袖を見るに
各紅涙をながし号泣すとぞいひしがぬく弔をなしける其後
小渕の住人皆老若まゐり立よりて参詣せしに又道者より

菓然国で平生殺ひをせずといまだ決せざる處に一百二代称光
院の御宇応永三十二年乙巳十一月五日の大地震の時に仏法紀南
ふかりて本尊然ハ目を翻てぞ守りたまう不思議成ける容貌を拝し
じ給ひ奉れし故　年来の殺ひを翻じけり
○同御宇に南寺の近所小渕郷に道名とかや申者ありけり
十四名の者とも彼者死去して四十九日に当る日の事なりや
越中にて立山より参詣乃僧ありて姥堂の前にて一人の入道に
行合ひ語りて曰某ハ下総国葛飾郡深藤の庄小渕郷也
と申所の名主道名とか申者なりしが殺生を営み近所に居住
しけるが殺生でも帰依しされば十四名のものとる間施主なる者
よ諸く今餓鬼道に堕して飢渇の苦しみ絶がたしと泣れ

松花の翔乃風に法乃色経しが徳不孤必有隣大明不蔵光志
うばいの小五代の聖主の国師として三聚浄戒の大祖たり清勝
寺中興開山慈威和尚こゝ也此上人いまさる山門にわたるもしとれ
彼炉中の香紙同じく忽然として赤栴檀の香と薫き
実つたえ覚束なしとて天王寺へ当寺より使者をもて尋ね給ふ
所に当寺より上件の手紙返答す至て其の上人不審
を散じ給ひしとぞ
○一百一代後円融院御宇康暦年中円心寂上座といふ若僧
あり瑞像の厨中にまゐて手紙不審として御手の合掌中へ入させ
まゐらせ件は御足をと探る忽癩病を得く貴経なりしぞ也
又当寺の宿住仏餉といふ者あり瑞像の御足を離し

よりて天竜開山夢窓国師に宣旨をかうむる然るに国師七十日の
間沈香を焼薫し続けるに程遠からず附着して其浄指の間なる
柿をお感得ありて帰られれば則柿のさね白色の舎利と化しぬ是
今ハいよく分附當寺の霊宝なり又膠の滴ばまる削屑かこれ
開山とハ国師香炉の火にて焼給ひしの其円観上人と申しハあり
元ハ山徒にて顕密兼学の才一山に光あり時に叡山の衆徒
の誉口ほどよくみず然して久しく山門澆漓の風に随ひて憍慢の愆ハ
高くして終に天魔の掌握に墮せし志にし公請論議の誉
を抛ち高祖大師の冥鑒に帰せんとかし一度名利の纏を脱し
去る寂寞の苔の扉を閉て神の行ハ西塔北谷の奥に至る
青竜寺に於てそこで三衣を荷葉の枕の霜に晒せ一鉢を

和五年丙辰三月十六日から盖宵十箇日の間ハ念仏ハ斎忌道場
を撒を除けるかし無仁の一乱に依て本尊も東京の家に
小遷座候ひまれとハ十箇年に及て退転すといへども文明十
年戊戌に再び興して今にいたるとぞ
○当寺再叡の君ハ後柏の舎利之由の事人皇九十七代後醍
醐院重祚建武年中に天下大乱起りし時但馬国の住人河越
十郎といふ武士ちか中に乱入して御堂の内へ入て弓れ揃みて一本
ある仏つき奉りて尼の御小指をつき折奉る十郎ハ忽ち
癩病を請て苦痛逼迫して立所に死去し侍りぬ仍て彼が知行
分但州加屋郡郷を当寺に宛行去行に彼御指を継奉る人
が為に様々の事祈ていへども終に所望事なし天皇叡慮に告

うのら鎌倉より黄金百両寄進ありて因島山林等七ケ所を寄附せられて今にあり秘る間毎年正月廿二日正忌の日乃供養ハ今に退轉なかりしものなり

○大念佛執行の事瑞像我朝に来り給ふ事ハ人王六十六代一條院の御宇永延元年丁亥なり爾来二百九十二年ニ當く九十代後宇多院の御宇弘安二年己卯三月六日より神さく夢の告ありて九十一代伏見院の御宇に円覚上人に勅して往餘善根のために四衆乃業を勤て法金剛院壬生の地蔵堂など所々に始行ありといへども當堂の大念佛を根本と云是によりて参詣の群集門前に市をなして今に退轉なきを未なく三月六日より神ゆて同十五日に結願を貴賤円寂ハ長

福山建長禅寺は云く彼蘭渓和尚を請して開山とし初発
治建長より以来二十余年鎌倉の主として四海を掌に握
て世治り民淳なりきされども吾国の守護國司地頭領家
人いくばくもあれ不當猛悪の者ありて人は知らず押領し人民
百姓を艱まんとて躬ら諸国を巡りて是を図べしとて髪を
剃て法体となり六十余州を修行せられける所に當國に一宿
通夜ありて佛前に坐しまし朦朧となりける所に釈迦の戸帳
をおしあげさせ厨子をおし給ふに直に拝をまゐらせて
感嘆の餘り歌を詠ず

諸縁の寺後の世までも祈しと君もけふより秋も変らじ

かやうに詠じて後は當國番所に係りて下向せしが

彼牛の皮を剥て帷子を着せ行けるに火葬を行ふ時迄なりしさて
異香薫じ天花乱墜と謂ふ往生の奇瑞を顕はせり彼牛の
膝付る枝木にそハ西の門を立る門の南方の柱に付をきりて牛の
の骨納められて今に是あり皮にそハ御堂の天蓋と造営乃皮
にそハ華鬘を作りて本尊の御厨子の前に掛しまぬ彼華鬘よハ
あめ牛の像を画て今に餅あハに是あり三月十九日ハ彼牛乃死
ける日なり年々此日を先師御所持の結縁今に退轉なし
○先代武蔵守平朝臣泰時の孫修理亮時氏の次男相模
守時頼ハ法名道崇後に最明寺と号ハ八十七代後嵯峨院
の御宇寛元四年丙午に降蘭渓宋朝より来る八十八代後
深草院の御宇建長元年己酉に到りて平元帥時頼巨

彼牛をみんと思はゞ明日早朝に当寺の西より材木を牽て七疋
の牛あり其中に第四番にあたりて黄色なる牛あり是彼則
汝の母なりと見給ひて悲哀はさながら夢想のありけるにお
どろきて早朝に西の門へ出て待給ふに夢の告のごとく黄なる
牛あり則彼牛を乞て当寺の庭にひきよせて寺へ送る彼牛をば
さまざまの香草を飼合せを調て養ひけるに如来の冥加を告て言
く今汝は牛にうまれてハ其宿業を果し業因を尽すそこで人
身を受くべけれども汝が母を養ふがゆゑに其間都て罪を消ね
べし但常住の牛なれば東寺へつけ材木を牽て亡し給はゞ
必解脱を得べしと忽告によりて東寺へつけ材木をひかせられしより
彼牛死て葬送の儀式ありて孝子を以て如来の清濡を拭する

の准母なりき後堀川院の御母ハ北白河基家卿乃女なりし
安嘉門院の母も同じ彼御母ハ北白河女院とそれりましけるを
ども御在生の間さまる若假をも作給ハど剃御除給ひ乃砌
風雨烈て雷電殿して諸人の驚騒るのみならず安嘉門院ハ
いつもすく御持仏堂よのそれりほて御かせ給ふ御母儀の生
處定かく若不りそハ御しましまを思ふるれバ七ヶ年乃間称く
の追善給いともまく御して供して給ぶてハ母れ生ふ給まして
給へとそ高ちふ歩みをけふび多年此本尊に祈誓ありをるれバ
ある夜彼の御附夢想の告あり汝の母罪深くして地獄ふ入し
かども直實れ志をゐつく様くの追福をいとるゑゆへ重き
転じて軽く受今ハ地獄をまぬで畜生道よつへく牛に生代りたり

須細も皆袂をそ絞りたる僧都も涙を押さへて申されけるハ此事
げにも道理なれバ面々に奉加の志ハ悦しまいらせ候へども凡夫の
習ひの悲しさハ家々に帰りなバ明日よ明後日よとせん
ほどに其志ハありとも指当る世間の営みにまぎれ打忘れて
多くハむなしかるべし奉加せんと思ふ人ハやがて此座にて献じ
給ふべしと申されけれバ貴賤上下男女緇素或ハ衣服脱ぎ
小袖をぬぎ直垂大口太刀刀等に至まで群集の人々奉加
しけれバ雑白の其外わづかなる物まで出し置て造営有ける
となり附り取くハ月出度泥法者なりと申傳へけり
○毎年三月十九日本堂の御身拭と申す事始りし其由来
ハ安嘉門院と申しハ後高倉院の女五宮八十五代後堀川院

説法に曰く我釈尊ハ一代の教主として八相の化儀を示し八万四千の法門を説六趣四生の群類を度し給ふその昔菩薩の行を修し給ひし時三千世界にあまねく身命を捨て十方の浄土に擯棄せられたる我等か世に希に出現して調伏し教化して今より此娑婆世界の衆生をハ悉く我子なりとのたまへり世間の父母ハ唯今生一世の身を助く釈迦大師ハ多生利益の恩出離解脱のみちを教へ給ふ真実の父母なりその恩世間の父母よりハ百千倍してたとふへきかたなし世間の父母の家の焼たらんをハ其子としてハ一人とても遁らじ況や真実の父母の御堂の焼たらんをみん人ハ一力にても立するにも随ひて分に随ひて財宝を投くなれは助成し給はざるべきと因衆吾我除て戸進するか諸人けふも此

と武州の慈光寺の住侶上求法師諸人をすゝめて再興せしと廿八
年を経て八十四代順徳院の御宇建保五年丁丑にて炎上せしを
此時ハ栂尾明恵上人貴賤を勧進して造営の功を遂て当寺に
建立せしと或時七ヶ日の説法有けるに伊勢天照太神宮八幡大菩薩
神あまりて大小の神祇諸天八部衆悉く説法の砌に影向ありし故に
春日大明神ハ毎夜法施し給ひける由伝へは其時の神々をバ内乃
擁護に勧請しまつりしなり
○釈迦堂ハ興隆勧進の為に五十ヶ日の間東西の名僧かぞへがたく
毎日説法ありし其中に仁和寺の静遍僧都と申すハ又禅林寺の
大納言の僧都ともいひき平相国清盛公の為にハ俗の姪大納言教
盛の息なり小野廣沢両流を極めて顕密の誉れありし彼僧都の

あるものなり
○八十代高倉院の御宇治承元年丁酉の春乃比諸人ゟ夢想
の告ありて示て言く我将西天ゟ御くだしと然る間上下万民鐘を
蹲ひ群集し雲霞のごとくにして御名號を備ふる事涅槃
乃會にひとし南北の名僧東西の浄侶微妙の伽陀を唱へ様々の
法施を獻て御願ハ此國に久しく止りて衆生利益し給ふ也
と信心深く称讃の涙を袖で々れしいふや後に又告ありて萬人
餘りに歎き止向どがへり給ふべしと也其時よし帰ありければ
今時の衆生いかでか尊容を拝見し奉らんと躊躇し陸地乃
如来ハまさへきものなり　宝物集にもみえたり
○八十二代後鳥羽院の御宇建久元年庚戌の年に御堂回禄

いよ〳〵今に請要来して是なりしや
○人皇七十三代堀川院御宇に盲目の聖一人あり清肩と名く清
涼寺に居して日夜弥陀の名号を唱へて安養の往生をねがひ
ある年持病に侵さるゝは宿縁にしてひとへに懴悔して
いよ〳〵我宿業の深重なる故なりとて一生の間盲目なる然といへども
又我宿福深厚にして古の是非に縁を結び此瑞縁の應あらば
久しく居して弥陀の名号を唱ふる事終得るあらば本懐を遂ん
くは一日成とも眼を開き直に尊容を礼拝し奉らんと日次
詞いまだ尽ざるに盲て久しき両眼忽に開けるもとより是則
本尊の霊験念仏の奇特なりき欲レ知二過去因一見二其現在
果一欲レ知二未来果一見二其現在因一とかれし金言をそのまゝ

今の釈迦堂是なり清凉の建立宗叡いまだ遂ざるに奝然寂
滅す時に六十七代三條院の御宇長和五年丙辰三月十六日なり
入滅の後に弟子盛算かさねて叡聞を經て棲霞の西に堂を
清凉寺と名付て天竺の霊鷲山震旦の五臺山を写しまうく
の霊跡の土を唐土より取来りて壇を築瑞像の厨子を安置
し奉る故に日本有験の霊場三国無双の瑞像なりされば
上一人を始めとし下萬人に至るまで渇仰の掌を合せ信仰の
頭を傾ぬ事無比類ものなかりし
○此瑞像来朝の時豊後国直入の郷に帰依浄道満なる家に
何人とも知ざる老僧朔毎に錫を開きて地下人見人あやしみ
不思議の思ひをなし在所の上来紙同じく往昔より斎場有紙

遶見しものなり末代の衆生渇仰是を仰がざらん
○大宋の雍熙三年丙戌台州の鄭仁徳といひし買船に便
して奝然と共に本朝に来降あり人皇六十五代花山院
寛和二年丙戌七月九日帰朝の旨叡聞に達す大蔵經五千
四十八巻及十六羅漢の絵像同時に渡せり明年に至て
六十六代一條院永延元年丁亥二月十一日京洛に入て[illegible]
すなはち太極殿に安置しまいらせて毎日一升の白飯を供養し
また三年を経て大内北野蓮臺寺に安置して修理ありし
て帰依ありしかとてまつる其後に奝然奏聞を経る
愛宕護山を以て唐の五臺山に准て更に清凉寺を建
瑞像を遷座し奉りて先一宇の小堂を造りて安置し奉るか

げらんまな欲を捨て足るを知れば本仏新仏各その所にて
争ひ給ふべしよ遷りかへし也給へられ別神力の及ぶところにあらねど
希代甚深のことなれば王臣足をつくさず尊敬し奉りつゝよりしきかく
の霊験筆手にしも及びがたし然るに釈尊忉利天より帰降の時
此尊像金銀水精乃階かけしまで出迎に参り給ふ
本仏まのあたり摩頂授記して未来乃済度饒益し給へと附属
したまひし仏約なれば此仏も三国伝来まし
まして末世の衆生を済度し給ふありがたき時に出でて
感涙とどめあへず信心の縁起し給ふ風波の
難もなく吾朝に渡しまゐらせしば日本我朝のふさぎ
中は此仏かへりたまふとて帰らく宝物集などに見えし

ますます一面尊信し王臣景敬し上下万民渇仰し奉る事浩々とし
此時当て大宋雍熙二年太宗皇帝より奝然へ弘済大師の
号を賜ふ
○寔に於く奥深奇特の事なれば彼毘首羯磨天の作
乃瑞像弘済大師奝然へ密に御告ありて曰我東土の衆
生化度の縁あり願くは汝と共に海を渡りて扶桑国に
往く群生を利益すべし怪む事なかれと也奝然は夢
寤て奇異のおもひをなし則智應を運て香木をもて張栄
が新作の像をあらはすべければ聊も古仏に争ず一西御しまさ
ど然ていへども模像没しやさん事をおそれかなしくはずらうの至
なりと思煩ひ一夜仏を専にして祈誓を致し入れさり免

巡礼せしむ諸方の名迹を悉辞し巡遊して東京に帰るを到る
皇帝太宗奝然が甚深の志を感じ給ひ河に於て奝然が
首張万遍を以て奏聞して申さく我身賤しといへども不思議乃
機縁をもつて瑞像を拝見し奉る事甚ぞの本懐なる事
伏して願くは其の尊像を模し新に日本国に渡し奉り上一人
より下万民にいたるまで善縁を結ばしめんとわがねがひなりと申
奉る所に皇帝いよいよ奝然が懇勲の志を感じ思召て便
像を内裏の西化門の外に出しまいらせて故宮殿に精舎を
なし新に啓聖禅院と号し銅銭一百万緡を捨て佛師の名
匠張栄をして彼精舎におゐて模し造らしむ日ならずして成
福智円満し妙相端厳なる事毘首羯磨の作にも古佛にかはら

皇帝則迎へて内裏の滋福殿に移しまゐらせ毎日に供養し
給ふ見聞の緇侶等都にのぼり拝しまゐらせんと乞ふ彼せいうの乾
叶はざりしかれしと稱給へる
○奝然の上足の弟子盛算法師彼地梵院に往ていにしへの傳記
等并歴代奇特の事共を記写して十二月十九日に京に到る
同廿一日に奝然等皇帝に覲す明年は雍熙元年甲申
なり正月中に宣旨を蒙りて京の大小の寺院を巡礼し巡り
ます奏聞して曰彼瑞像を拝見しまゐらせん事宿望なりとし
處に張行首といふ人に仰て滋福殿に参入して瑞像拝見乃
事なりしを奝然法師盛算法師并に一行人等也三月に
到て五臺山へ参詣のことを奏聞を則公憑を賜る彼山中に

り修り給ひし事を日本に於て久しく竹閣て拝見し
奉らんが為なりき然るに但元閣のこと有て佛像ハ渡りまさず
其の子細を寺僧に委しく尋ねるに寺僧答て曰く彼瑞像天
竺より渡りて世経して後二百餘年乃間所々に移り給ひ隋乃開
皇九年より已来五代の時の晋の代に至るまでハ當寺に在りとぞある
而しまた東三百餘回北寶を経て代々の帝王供養し
恭敬せしめつゆへに祠を作りて演畫しかるに宰ハ大丞相李昪と
いひし人有りて江都の南昇州金陵の建業城に移しまゐらせ長先え
寺に安置して趙宋の太祖乾徳年中に偽唐の金陵を破り
偽主李煜を生捕て彼瑞像を迎へて東京汴梁開封城乃左
街開寶寺の永安院に安置し奉りて供養を申す第二の主太宗

あり今新に啓聖禅院と号せしに移し奉り礼敬尊崇崇て
計なかりしとぞ
○抑此栴檀の瑞像かくのごとくして大日本国に渡したてまつる
五臺山清涼寺に安置したてまつる由来をくはしく尋れば
人皇六十四代円融院の御宇に南都東大寺に沙門あり
奝然法橋と名く学三論をきはめ名天下にきこゆ
宿願の子細ありて唐の商人陳仁爽徐仁満が帰国の
舟に便船して永観元年癸未八月一日に纜を解く時に
趙宋第二の帝太宗皇帝太平興国八年癸未の年
にあたり十月にいたり宣旨をかうふり淮南揚州の開元
寺にいたる地蔵院において是は別彼佛手ある八開元寺の閣

一五代の時乃唐乃荘宗長興三年壬辰の歳にいたりて賜紫
の沙門十明瑞像の記を作りしに梁隋乃開皇九年己酉より
淮南楊州長楽乃道場に移しまいらせ長興壬辰にいたりて
三百四十四箇年を経より次に五代の時乃大晋の高祖天福
年中に大臣相李昇自立て南唐と号し江都より南昇州
乃金陵乃建業城へ遷しまいらせて永く長先寺に安置し
て瞻礼供養しを次に趙宋の太祖乾徳二年甲子に李昇を
滅して唐乃名絶しそのち東都宋都の梁苑城の左街
開宝寺乃永安院に遷座ありて同二代目乃主太宗皇帝
祥に禁中の滋福殿に安置し給ひしを後に西化門乃外より
太宗第二乃皇子今上皇帝一百万緡を捨て造られける宮

長楽の道場を改て大雲寺となし毎月香油幡花資具
等の供養の具を備へ給ふ第七の主玄宗開元の年癸丑に
位に立同十八年庚午の歳勅よりて年号を改く寺の額を
して海州の刺史江夏李邕に詔して書して乃開元寺と
称す又第十七の主武宗諱ハ炎極て無悪の主なるによつて
會昌五年乙丑に三寶を滅し一天を脱蠡とする事數多
俗に帰し佛を滅し殘すところ世の為に窮くし彼瑞像ハ粒
儼然として瑞光放く闇昏を照破し給へハ華夷帰依し
貴賤瞻礼する事濁世といへとも聖代に異ならずといへり寔を
以て楼閣太虚に凌ぎ殿堂赫日に摩して香花舊の如し
礼敬昔にかはらず累代の帝王崇重せずといふことなかりき

○李唐の高祖乃世武徳六年癸未の歳東海の賊李子通
といふ者あり常州に據として呉と稱す十月八日にいたりて瑞像
乃閣を壊てことごとく宮室に造らまく欲せし時に閣主行力法師
發願をなしてのたまはく我身を焚死すとも仰ぎ願くハ此閣
をして毀滅せしめん事を免れしめよと明年に至て此李
子通高祖のために滅されて因果て志願のごとく其閣悉く
ねとうの事を得ざりき

○唐の第四主則天皇后といふハ第二の主太宗の妃第三乃
主高宗の継母なりしが太宗崩御なりし後高宗の妃となる
まつり高宗崩して後天下のまつり此故に第四乃主と
いふ姓ハ武なるが故に武后とも申す長安二年中母

劉宋の高祖皇帝と称し年号を永初と改む
〇う後より以来宋斉梁陳已上四朝の間一百七十四年江南の竜光寺に安置せり隋の文帝開皇九年己酉此年陳滅ぬ妄に乱紛を欲する者あり奏して曰江南に異気有と云時に智脱といふ沙門ありて奏して曰これ必竜光寺の瑞像此気あらんと仍て彼霊像を迎へまつりく長楽寺の道場に安置し給ふ隋の煬帝の時より此段にし少道瑞と号す即今の開元寺是なり又沙門任力といへる僧あり衆人に勧て飛閣を立て彼像を移しまゐらす是則開皇十八年戊午の歳なり同二十一年辛酉に又恵纏といふ沙門ありて臂を燒身を剥衣鉢を捨て供養しなりけるとかや

姚興も崩じて其子姚泓位に立同廿年乙卯ハ彼尊像と
得て後十八年を経たり此年劉宋高祖いまだ劉裕と
いひし時晋の将軍として長安を攻め姚泓を擒にして乃
尊像を得て錺たる華車に乗せまゐらせて江南へかへる劉
裕大に喜ていはく吾国しばしば人の国を破り人の貨を呑
人の財を掠め人の子を擒れ貴き佛ハ此尊像なるを
得てこそ国の寶なりとてすなはち竜光寺に安置す彼竜
光寺本の名ハ青園寺といふ道生法師此の寺にて涅槃経を
講ぜし時竜蔵得し来て穏閑せしゆへに改て竜光寺とす
彼尊像感得せしより以来六十年を経て東晋十一の帝恭
帝元熈二年庚申の歳劉裕東晋を滅して位に立て

経て太元十一年丙戌に秦に帰る

○呂光既に丙戌に秦にかへるといへども去年乙酉歳に東晋の将軍姚萇がために苻堅は討る姚萇竟に自立て後秦と称すと云姚秦 長安を都として年号を白雀と號す同二年丙戌に呂光将軍帰朝すといへども君已に亡ぬるが故に号を改太安と行ふ従より凡十二年を経て東晋の第十乃帝安帝隆安二年戌の年は後秦の姚萇が子姚興弘始三年戌にあたる夏五月に呂光も又姚興がために伐かれて即梅檀の瑞像并に羅什法師を得て長安に帰る又十四年を経て東晋の安帝義熙七年辛亥は即姚興弘始十三年辛亥也此年八月廿日羅什入滅と同十八年癸丑

又ども是より遠き所なり已に東天竺の東は真丹の境なる亀茲国に請来しき此の国王白純王太子に喜く是像并に羅睺を請じ留て宮の内に置て供養し給へるゆへ今に西蕃乃二十餘国を化するに帰敬しけれといへりけれし

○彼瑞像震旦に光降し給へる根本は東晋第九帝孝武帝太元二年丁丑は即前秦の符堅の建元十三年丁丑に当る此年正月に太史ありて奏して曰星あり外国の分野に見ゆ正しく大徳の智人ありて中国に入べしと符堅乃いはく朕聞く西域に羅什法師といふ聖人ありと是れ豈此人なるべき瑞兆にあらざらんやとて即呂光将軍に十万の兵を副て亀茲国を伐て是像并羅什法師を奪ひ取て十箇年を

○彼栴檀像彫刻ありてより以来年暦を按ずれバ此ハ姫周第
四の帝昭王廿四年甲寅四月八日に降誕あり同第五の帝穆
王十二年庚寅の四月如来三十七歳の時也 一統辛卯 三十八歳 母摩耶
夫人の為に忉利天に昇て給ふ此歳神く優塡王其の瑞
像を造る爾しより以来西晋第四の帝愍帝建興四年丙子
に至て一千三百七年の星霜を経て宝亦国王あり弗舎
蜜多と名づく仏法を破滅して此栴檀像をも失ひ奉らんと擬
す時に梵士あり姓ハ鳩摩名ハ羅琰といつて閻浮提第一の
栴檀像已に滅し給ハん事を悲しく忽ち出家遁世して此瑞像を
持して東の方震旦に行んと欲せし晝ハ則羅琰法師瑞像
を負奉り夜ハ又栴檀像羅琰を負給ふ故に道険難を経ると

千年に法の弟子等を以て汝に附属をし給ふ優填大王佛に白
て言く佛の滅後に佛像を造らん者幾の功徳を得ん乎佛の言く
佛眼を以て観じたまひて佛像を造る者は諸十方の佛前に生
れむと阿含経又は観佛三昧経或は造像功徳経等乃意なり
則ち世尊も瑞像も二尊共に祇園精舎に在らんとのたまふ
瑞像世尊に向て言く前に進て精舎に入りたまふべしと世尊
又瑞像に語て言く我去て後我化縁は久しからずして涅槃に
入るべし汝は世間に在て衆生の利益久しからんと問答三
往復して遂に瑞像の前に別れて本座に帰りたまふ又寺に
於て二尊両足を移して精舎の門前を相去ること二十歩
なり優填王歓喜し給ふ事極りなしとぞ

得給へる如く一切衆生ゆして不肖の業障消除せん事
喩へハ日光の雲霧を晴らすが如しと阿含経并造像功徳
経に説給ひけるか
○其時世尊忉利天の衆會に告給ひて今七日を過て此界
より閻浮地里僧伽尸国大池水の側に下り給ふべしと宣
給ふ帝釈自在天子に告て曰須弥山の頂より僧伽尸国乃
池水の底に至るまで金銀水精の三ッの階を作らしむ仏則金
の階より下り給ふに優填王の新に造りたる像親世尊の
降るを階の下に待ありて時に世尊長跪合掌して其像
に向ひ給へバ虚空の中に百千の化仏在して又皆合掌をなし
ひき世尊彼像の頂を摩て記を授てのたまひて我滅後一

以て栴檀香木を以て如来の形像を作らせんとし彼国の工
匠どもを召て言く我ゟ仏れ小分の相好をハ模し奉るべし光明
威徳をバ争か模し奉るべきやとし時に毘首羯磨天則其
身を変じて一人の工匠と成王に向て言く吾ハ是世の工匠中の最上なり
大王の為に仏像を作奉んとし時に王大に喜びそれより
香木を撰び荷負して以て天匠に与ふ言く善哉仁者
此香木を以て我為に釈迦如来の尊容を作り奉るべし也
時に天匠斧を執て香木を破るに其音三十三天に通じて
仏の今座に聞ゆ仏力を以て音の及所の衆生聞者
悉く罪垢煩悩悉く消滅せし然而日ならずして端厳
微妙の仏像を成給ふ此時王浄信を生じて柔順忍の悟を

釋迦如来栴檀瑞像記

南瞻部州大日本山城國嵯峨五臺山清凉教寺本尊釋迦如来栴檀乃瑞像ハ常途れ本像ニハ異なり生身の如来とし値奉る思ひを作すべし其所以ハ釋尊摩竭陀國にて三十歳にして成道し給ひて後御母摩耶夫人乃御為に祇園精舎より忉利天に昇りて善法堂の金石れにして結跏趺座し一夏九旬の間報恩の御為に摩訶摩耶大報恩経を説給ふ諸天乃得益無量無邊なりき此時人間におゐて四部の弟子如来を見奉らざる事譬バ星乃中に月なきがごとくにして皆愁に沈む事父母に離るるがごとし時に拔嗟國のあるじ優填大王恋慕渇仰の餘り國中の巧匠を

嵯峨
釋迦如来栴檀瑞像三國傳来記　全